.712
特244
267

日獨防共協定の意義

黑田禮二著

日獨同志會
小冊子第一輯
10セン

日獨同志會發行

0010429000
0010429-000
特２４４－２６７

日独防共協定の意義

黒田礼二・著

日独同志会

昭和１２

ABJ

特 244
267

日獨防共協定の意義

私の題目は「日獨防共協定の意義」と言ふのでありますが、時間にも限りがあるので、成可く心だけを申上げることとしませう。

扨て日獨防共協定に就ては最早種々な方面から大體論議し盡されて居りまして、今更私が事新しくその意義を闡明するなどいふことは喧嘩過ぎての棒擔ぎの感もしないではない。これから先の將來はむしろその協定を如何に運用するかといふことの上に爲政者の使命と國民の覺悟がかゝつてゐることゝ思ふ。然し扨てこの協定を運用するに就ても、我々國民一般の興味が失せて刺戟が無くなつてゐるやうなら、爲政者側に於ても洵に力の入れ甲斐がない譯である。そこで私はこの席に於てもう一回お互ひの記憶に想ひ浮べて見やうといふ意味に於て、この問題を私の個人的な且つ主觀的な立場から再檢討させて頂きたいのである。

御承知の通り日獨協定の內容は條文の上から見ると極めて簡單に出來上つて居ます。今冗慢を厭

昭和十二年 内閣 調査局

はずそれを讀み上げて見ると、左の通り、曰く……(辯士條文を執りて朗讀)……『大日本帝國政府及び獨逸國政府はコミンテルンの目的がその執り得る凡ゆる手段に依る現存國家の破壞及び暴壓にあることを認め、コミンテルンの諸國の國內關係に對する干涉を看過することはその國內の安寧及び社會の福祉を危殆ならしむるのみならず、世界全般を脅すものなることを確信し、共產主義的破壞に對する防衛の爲め協力せむことを欲し左の三條を約す』と、先づ冒頭に揚げてある。そしてその三ケ條といふのは……『第一條、締約國はコミンテルンの活動に付き、相互に通報し必要なる防衛措置に付き協議し且つ緊密なる協力に依り右の措置を達成することを約す』……『第二條、締約國はコミンテルンの破壞工作に依つて國內の安寧を脅される第三國に對し本協定の趣旨に依る防衛措置を執り又は本協定に參加せむことを共同に勸誘すべし』そして最後に第三條として本協定が五年間效力を有する意味のことを規定してある。

扨て以上讀んで見た通り勿論この協定は單なる通商の條約でもなく、又經濟上の條約でもない。が同時に又以上の文面のどこを探しても、日本が獨逸と政治的若くは軍事的な何等かの約束をしてゐるといふやうな表現は毛頭見えない。

さればこそ此協定の當事國たる兩國の政府自身も亦、この中には防共の目的以外に、毫も軍事的

又は政治的の意味を含まざる旨を繰返して公表してゐるのであります。そこで若しもこの協定が、例へばかの蘇佛相互援助協約みたいな政治的若くは軍事的意味を含んで居ないものとするならば、一體これは如何なる種類、又如何なる性質の協約であるか?……といふことを考へて見る必要がある。然るに遺憾乍ら我國の民間の輿論を代表せる筈の諸新聞雜誌の中にはこれを適確に說明したものが見當らないであります。この協約が十一月廿五日に發表されると我國の新聞紙の多くのものはたゞ呆氣に取られて吃驚りした。まるで足許から鷄が立つたやうに考へて殆ど祿な批評さへ出來なかつた。或る新聞の如きは寧ろ不平滿々で、こんな無茶な協定を藪から棒のやうに出されては國民が判斷に苦しんで迷惑も甚だしい……斯樣な重大な出來事は尠くとも一應前以て國民に相談し、大體の方針を決めた上で行ふべきであつて、それを無視した遣り方、即ち國民外交に非ざる官僚獨善の斯かる秘密外交は、その方法それ自身が既に排擊さるべきものである……と言ふ工合に飛んでもない見當違ひな力味方をしてゐるものもあつた。一體今日のやうに國際關係が各國相互の間でデリケートに響き合ふやうな時代に於て、特に秘密を要する外交協定を一々その計畫の始めから世間に發表してゐたんではこれに利害關係を有する他の國に、忽ちその裏を搔かれる結果となつて、折角出來る協約も全然出來ないことになつて了ふ。それから藪から棒のやうに出し拔けに發表されちや

困る……と不平を言ふのも、實は甚だ以て滑稽な話である。國際情勢に關して何んにも豫備的知識を持たぬ一般の讀者がさういふ工合に吃驚りするなら致し方がないとして、苟も國際的な動きに就ては立派な通信網を有し、堂々たる外報通の權威を誇つてゐる筈の日本の大新聞が、少し氣をつけて居りやもうずつと前から大體想像のつく筈の現象を、まるで茫然自失するのは洵に見つともない始末であつて、大體こんなことでは輿論の木鐸たる大新聞の資格がない！

要するに是等の大新聞は今日の既成政黨と同じやうに、國際時局の眞の危機に對してハツキリした認識を持つてゐないものだから、兼々から國家の高政治的な非常時の惱みに考へを致す興味がなく、單に民衆に媚びて今日の遺繰問題に計り沒頭してゐるのである。民衆を指導する代りに逆に民衆に引ずられてゐるのである。國民の意思を代表する代りに逆に國民の意思に追隨し損ねてゐるのである。

さう言ふ事情であるから日獨防共協定といふ大きな問題が起つても、これに對してその眞諦の奈邊にあるかを察知する明なく、まるで見當の外れた輿太を眞面目な顏で言ふのである。或る者は選擧民や、或は讀者層に阿諛するために、これを國內政爭の具に供し、防共協定それ自身の闡明や啓蒙の仕事はそつち退けにして置いて、例へばやれロシアとの漁業條約の交渉をコジらせたのは以て

の外だ！……などと、妙な所へ力を入れて騷ぎ廻る。私共の考へでは日本が滅びるか、それとも國威が宣揚されるかといふこの偉大なる協定の意義の前には鮭の罐詰の問題やなんかは比較にならぬ程チツポケな些事だと思ふが、然し私共と世界觀を異にした人々は全然眼の着け所が違ふ。從つて防共協定の意義と價値とに關しては、全然知らぬ顏をして、そして英米の新聞などがこの協定の惡口を書くと、扨てこそ我が意を得たりと計り合槌を打つて、鬼の首でもとつたやうに喜ぶのである米國のハウス大佐やフランスのダラヂェーの徒輩が、事の眞相にも觸れぬ日本譴責の批評をやると不甲斐なくも帽子を脫いでお詫びをするやうな不見識な論文や社說を書き、反對に自分の國の外務省や、又ヒットラァの態度に就ては却つて恨みはらく〳〵の文句を並べ立てるのである。それを橫合から見てゐる蘇聯のスターリンや西安の共產支那人なんか、これは思ふ壺に嵌つたと赤い舌を出して笑つてるだらうが、所謂、日本の輿論と言ふのはそんなことには、一向頓着がなかつたのである！。

之れを要するに十一月廿五日の日獨防共協定に關し日本の新聞紙を透しての輿論なるものは大體滅茶苦茶であつた。たゞその協定の及ぼすその他の諸外國及國內問題へ及ぼす政治的效果に就て、極めて認識の足りない多少の批評があつた丈げであつて、進んでこの協定それ自身の重大なる意義

と價値とに就て判然分るやうに闡明してくれた新聞や雜誌は殆どなかつたと記憶して居る。

然らばこの協定の相手國たる獨逸に於ける論評は怎うであつたか？、御承知の通り今日の獨逸に於ては言論機關が完全に統制されて居ります。從つてどの新聞雜誌をとつて見ても、大體歩調が揃つてゐるのであつて、勿論その表現の多樣性はあるにしても、孰れも申合せたやうに同じ方向を睨んだ論評をやつてゐる。即ち國論が立派に統一されてゐる譯であつて、從つて外國人がそれを綜合して觀察するのは洵に便利であります。で、是等の諸新聞に共通した表現に依つて判斷するに、日獨防共協定は要するに國際間に於ける文化的な協約であるといふことに歸着してゐるやうである。が更に進んでその中から特に一つ二つの例を摘要して申しますと全獨國民社會黨の機關紙たる『フルキッシェア・ベオバハタァ』紙の如きはこの協定は明かに一つの爭鬪でゐる……ボリシェヴィズムに反對する一つの文化の戰ひであると言つて居る。その言ひ表し方に就て私共の留意すべきはこの『文化爭鬪』といふ言葉は、この新聞が出鱈目に新しく拵へたものではなくつて、既にビスマルク時代から存在する常套獨逸語であり、そして二個の異なる世界觀の政治的な爭ひを意味してゐるのである。それから今一つは『ボリシェヴィズム』と言ふ語であるが、一體今日の國民社會主義の獨逸國に於ては國內から徹底的に共產黨員を放逐して以來は、我々が今普通に使用してゐる『コ

ンミュニズム』といふ言葉を餘り使はないことになつてゐる。その代り——現に先刻ネーベル參事官もその御演說中に頻りに御使用になつたやうに——專らボリシェヴィズムといふ文字を使つてゐる。約らぬことのやうですが、それは各國の國民心理を表はすのに大變面白い事柄だと思ふ。例へば蘇聯ではコンミュニズムと言へば大威張りな言葉で、又獨逸ではナチォナル・ゾチアリズムと言ふのが誇るに足る表現である。然るに獨逸と蘇聯とは今日犬と猿との關係になつてゐるから、獨逸側では蘇聯をコンミュニストの國と言はないでもつと卑しめたやうな言葉でボリシェヴィストの國といふ。反對に蘇聯側は獨逸のことを成可く輕蔑した意味でファッショの國と、まるで味噌も糞も混同したやうな大ざつぱな言方をする。所が今日の日本では學問をするやうな智識階級の人々には最近までロシアの崇拜者や讃美者が多かつたため、ロシア人の眞似をして、敵も味方もファッショと言ふ言葉を使つて喜んでゐる。然し獨逸の方では今日右とか左とか、要するに階級爭鬪に關する觀念を撲滅して了つたので、コンミュニズム對ファッショといふ風な言ひ廻しを避けてゐる傾がある。即ち獨逸ではソヴィエット側で宣傳用として造語したファッシズム及びコンミュニズムといふやうな表現を一笑に附して排擊し、私共が日本で『共產主義』と言ひ表はすやうな場合にはもつと嫌惡の情を表はす『ボリシェヴィズム』と言ふ字を使ふ慣習になつてゐる譯です。それだから今度

の協定に對しても『フェルキッシェア・ベオバハタァ』とか『ベルリーナァ・ターゲブラット』とか『アングリッフ』など〳〵いふ大きな新聞は、その論調に於て大體この協定が『ボリシェヴィズムに反對する目的のもの』と書いて居るのである。では一體そのボリシェヴィズムとは如何なるものであるかといふことに就ては獨逸人の解釋に依ると單に我々が普通に考へる理想的な共産主義計りではなく、一種の國民的文明の破壞を目的とするユダヤ思想、又は唯物主義的な獨裁壓制的なそして極めて野蠻なスラヴ人のソヴィエチズムなど〳〵いふ、獨逸人にとつて極めて厭ふ觀念をその中へ叩き込んで綜合してゐるやうに見える。

併しながら獨逸側のことは偖て措き、一方我々日本人も亦、この協約を結んだ直接當事國の一つでありますから、そんなに他所事と考へないでこの協約に對する意義眞相をもつとハツキリ掴んでゐなければならぬと思ふ。

所が前にも申上げた通り新聞雜誌の論調はその認識の不足に依つて事の眞相に徹せざる滅茶苦茶計り言ふし、代議士は單にその言葉の點に揚足をとつて、この近世の世界外交史に劃期を與へた大きな事件を單に約らない國內政爭に利用しやうと計り考へるし、財界は財界で又その固有の自由主義的エゴイズムからしてこの非常時に直面しながら、平和を續けたいとの希望と、平和は永久に續

き得るとの事實を履き違へて、寧ろこの協定の相手たる獨逸を讒誣し、排ファッショといふ變手古な所へ論理を持つて行かうとするだけである。

一方この協約を作つた肝腎の政府はといふと、國民に理解がないと腹を立てゝはゐるが、扨て國論統一のために反對する者を取締る文化統制といふ組織は無いし、それかとて積極的に自分の意思を發表するに足りる機關紙——近代國家のいかなる國でも必ず存在する筈の政府の機關紙——と言ふものも持つてゐなければ、宣傳省の設備も缺けてゐる始末で、たゞ默つて泣寢入りになつてゐるに過ぎないといふ憐れな有樣だ。そこで勢ひ吾々國家の前途を懷ふ志有る者は、仕方がないから自分で愼重によく考へて判斷して見なければならぬ。そして正しいと考へた事は尠くとも國民大衆の前に卒直にこれを批瀝する義務があると思ふ。で私共は別に取り所はない人間だが幸にしてロシアや獨逸の事情に就ては普通一般の人よりも多くを見たり聞いたり經驗したりして能く識つてゐるといふ自信を持つて居る。そして同時に今日國家前途の多難に際しそのまゝ默つてゐることが出來ないと考へたものであるから、茲に日獨同志會なるものを組織して、我々の意の有る所を批瀝せんがために諸君の前にお目見榮してゐる次第であります。大體はさう言ふ次第でありますが、さて話を本筋に直ほして、果して然らばこの日獨防共協定の我が日本に於ける意義は何んであるか？

私の考へるところに依れば、本協定の先づ第一の意義は日本が國際間の孤立政策を拋棄したといふことである。日本の孤立といふことに就ては、只今一寸思ひ出すことがあるので、茲に序でに申上げておきますが、確かそれは千九百三十一年の春だつたと思ふ。

未だヒットラァが今日の如き政權を執らないで、野黨の首領として獨逸政界の表面に擡頭して來た頃にヒットラァはミュンヘンのブラウンハウスに於て私にインタァヴューを與へてくれたことがある。その際私は同氏に對し、いろんなザックバランな質問を試みたうち、特に國際聯盟に對する日本の態度のことを訊いてみた。所が同氏は私のその問ひに答へて『日本は近い内に聯盟を脱退するであらう……又脱退しなければならぬ』と斷言されたのである。

然るにその時分は日本の國内に於てさへ斷然聯盟を說退するなどゝいふ氣運はまだ一般に釀成されて居なかつたものだから――尠くとも當時、私の籍を置いて居た新聞の論調などでは聯盟を脱退するやうなそんな思ひ切つた空氣は全然なかつたのであるから――私は心の内で『成程ヒットラァと云ふ人物は野黨の猪武者だけあつて隨分思ひ切つた亂暴なことを言ふ人物だな』と輕く考へながら兎に角そのことを日本へ電報で通信して置きはした。所が不思議なことには日本は間もなく聯盟をどうしても脱退せざるを得なくなり、さうして又事實脱退して了つた。それに就て私は今でも實

は不思議に思ふのですが……あの時ヒットラァはいゝ加減の當て素つ法を言つて、そしてそれが偶然適中したのであらうか、それとも或は彼にはさういふ日本の重大な運命を彼の鋭い政治的本能で以て觀破し得るだけの先見の明があつたのであるか?…孰れにしても、それ以來私は彼といとふ人物に對して一種の神秘な感じを抱くやうになつたことは事實であります。そしてその席で私は一體何故に日本は聯盟を脱退しなければならぬだらうかと重ねて質問したのであるが、ヒットラァは、之に對して『自分は日本の事情に就て詳しい事は知らぬが、我黨の中には日本の政治に就て相當な識見を持つた消息通が居るから、その男に聞いたらよかろう』と言つた。彼がその時日本通なりと指定した人物は例のロエーム事件の犧牲となつた一人で――今はもう故人になつてゐるが、その當時はなほ立派なナチォナル・ゾチアリズムの鬪士として黨に重きをなしてゐた所の――クレゴリイ・シュトラッサァのことであります。でヒットラァの言ふのには『委細はあのシュトラッサァに會つて訊いたがよからう。が、私自身の考へとしては今の日本は聯盟に滿足してゐない筈である。即ち日本の方針は聯盟の態度に滿足し得ない狀態である。その點から考へても日本は結局聯盟を脱出しなければならぬ筈だと思ふ』とのことであつた。

そいつは餘り單純な言ひ方で、殆ど背槃に値する理由にはならぬ……と實はその時はいゝ加減に

考へて居たのである。然し乍ら今に到つて回顧して見ますと、その時のヒットラァの言葉を現代式の表現に翻譯して見れば日本は現狀維持に滿足の出來ない國家である。換言すれば現狀破打の狀勢に趨く國家である。從つて日本の將來は國民社會主義の獨逸やファシズムの伊太利と同樣に現狀破打の國家群の一つとして國際聯盟と握手協調して行くことは到底不可能であつて、結局はそれから脱退する運命に逢着するだらう……といふやうに彼の天才的に鋭い政治的本能がそれを豫言したのだと解釋するのが寧ろ妥當のやうに考へられる。

兎に角彼の豫言通り日本は事實聯盟を脱退した。然も四十二對一といふ惡く言へば全世界のボイコットを受けて聯盟を追ひ出された……若くは此方から追ん出たのであつて、孰れにしても結果から判斷すればそれ以來日本は全然極東に孤立したことになる。勿論その當時の日本は歐洲諸國と袂を分つて、全然自力で極東に孤立しても構はぬといふだけの意氣があつた。尠くともその當時の爲政者にも國民にも、東洋に於ては何處の國の干渉をも排擊し何處の國にも依存せずして自分の使命とする世界を開拓して行くといふ決心はあつた。從つてその時の我國の外交方針は『焦土外交』なる極端な言葉でさえ現はされてゐた位である。

併し乍ら何れにしてもその場合の『孤立』といふ狀態は一面から言へば消極的な孤立であつた。

惡く批評すれば人から見放され、人から憎まれた孤立だ。かの英吉利人の誇りとしてゐた所謂『光榮ある孤立』とは凡そ似てもつかぬ狀態であつたと私は考へる。

由來英吉利の光榮ある孤立といふのは、ナポレオン戰爭の後に自分の鼻先に擴がつてゐる歐羅巴大陸には成るべくなら干渉しない方が有利であるといふ狀態であつた。則ち干渉するのは寧ろ馬鹿げて居た……何故ならば歐羅巴諸國は王位繼承の擾亂とか其の他群小國のシ・ヴィニズムに基く約らない紛議がふんだんに勃發するので一々それに捲き込まれた上、金のかゝる軍隊など繰出して一緒に喧嘩して居たんでは實利上得る所が殆どない……それよりも自分だけ全然大陸諸國から獨りかけ離れて、外の國がどこにも未だ手をつけない自由な海岸に乘り出して、そこに海上權の支配と無主の處女植民地の獲得に專念した方が餘つ程得策である……その方が英吉利の社稷をより良く生きさせる繁榮への道である……故謂光榮ある孤立であるといふ風に考へた結果であつた。そういふ意味での孤立はつまり積極的に意識した計畫的の孤立である。從つて他國の制肘に基かず自分だけの意思に基いて樹立された所の斯樣な『グローリアス・アイソレーシ・ン』といふ政策は英吉利の外交を長い間支配した傳統的な誇衿であつた。そういふ英吉利と我が日本とは洋の東西の相違こそあれ、地理的關係に於ては一つは政治に他は極東に於て共に二つの嶋帝國として、鳥渡考へると大體

似て居るやうに思はれる。併し乍ら今一歩深く觀察して見ると、尠くとも聯盟を脱退した後の我が大日本帝國の姿は以前アルビオン島帝國よりそのまゝ類推的に歸納し得る國家――即ち『極東の英吉利』――とはまるで似てもつかぬものとなつてゐるのである。換言すれば、我國が今日現に在るが如き大陸政策に乘り出して以來といふものは、我國は對岸のアジア大陸と到底切つても切れない關係を持つことゝなつた。今日に於ては我が躍進日本の生命そのものはアジア大陸の中に息づき、アジア大陸の中に脈動してゐる。我が國は今やいつの間にか立派な大陸帝國の一つとなつてしまつた。從つてその生命線が大陸の彼方に奥深く引かるるやうになつた以上、今日の大日本帝國は到底獨りよがりの蹋蹐した孤立では居られなくなつてゐる。

何んとなれば我等が生きんが爲めに大陸政策を實行しようとする對照地域といふは歐羅巴若くは亞米利加の種々の勢力が微妙に錯綜して入込んでゐる場所なのである。彼等の或者はそこに經濟的物質文明的な勢力を扶植し又他の者は思想戰に基く戰線を張つて我が日本の生存を脅威阻害することに努力してゐる。さういふ場合に若しも茲に賢明なる政治家が居つたならば、その人はこの國家生命線確保の大陸政策を實行するために、その複雜な各國の利害關係の中から、一體如何なる國を合理的に選擇して自分の味方につけて助け合つた方が效果が多いかといふことを必ず念頭に浮べる

ことであらう。

斯の如くして出來上つたのが今度の日獨防共協定なのであります。さう言ふ大きな立脚點から考へて見ると、この日獨防共協定なるものは、先づ第一に日本が――國際列强競爭的な角逐場裡に生命を置くやうになつた『大陸帝國としての日本』が――これに依つて孤立の狀態を離れ得たと云ふ所に深く注意すべき意義が存在するのである。

扨てこの第一の意義からして、日獨防共協定は更に第二の重大な意義を推定することが出來ると思ふ。即ち日本はこの協定に依つて、茲に一定の目標を贏めた外交を始めたといふ意義に他ならぬ。由來外交なるものは極めて有機的な性質を持つたものでなければならないのであつて、徒らに形式的機械的な活動では凡そ無意味である。例へば萬邦協和といふやうな一個の立派な理想的觀念を實現するに就ても、亞米利加とも親善の誼みを結び同時に英吉利とも肝膽相照らし、更に其の他のAともBともCとも同じやうに萬遍なく仲善く手を握るといふやうなことは事實上出來る筈のものぢやない。それが可能であるなら洵に結構な話であるが、殘念ながらそんな狀態は存在し得ないのである。何故ならばABCの國々間にはそれ〳〵何等かの形に於て利害の共通してゐる點もあるだらうが、同時に又相互に排蹐してゐる場合もあらう。だから問題はその際或る一國は他の如何な

る國を選んで握手提携した方が自分の利益になるか……同時に握手なり提携なりをやつた場合には他の第三國が特に不愉快や迷惑を感じたりしても最少限度に於て仕方がないと考る點にある。それが單にお世辭を言ひ合つて八方美人的に頭を下げて廻るやうな虛飾な機械的な形式的な外交でない所似である。その意味に於て今回の日獨提携は今迄のやうな態度が曖昧でなくつて或る一定の國家群には特に親睦親善の實を擧げこれに敵對する國家群に多少の犧牲があつても之れは仕方がないといふ所謂國家の意思に一定の態度を決めたことになる。具體的にいふと今度の防共協定に於て日本はその對手國として世界中のいろんな國から毛嫌ひされ、同時に世界中のいろんな國から尊敬されてゐる所の、謂はゞ一種の癖若くは型を持つた獨逸を選んでゐる。それは日本が一つの國家として の進むべき態度を表はしたものだと思ふ。換言すれば今までの樣な無援孤立の狀態から離れるためには對手がどんな國でもよいといふのではない……單に寂しいから溺るゝものの藁みたいに如何なる國とでも手を握るといふのではない。一つの目的を以て、そしてその目的を達成する爲めに特に獨逸といふ特種の國家を選定した。それに依つて日本の外交には一つの立派な目標が出來たといふ所に、この防共協定の第二段の重大な意義が歸納されるのであります。

然らば日本が孤立無援の狀態を脱却する爲に何故態々獨逸を選ばなければならなかつたか？或は

もつと他の國を選んだ方が寧ろヨリ多く賢明ではなからうか？　獨逸は經濟上、國際政治上、極東とは餘り關係がなささうな國である。成程獨逸は近頃急に恢復勃興して大變元氣がよくなつてゐることは周知の事實だが、然し東亞の天地を論ずる場合には大して關係がなささうな國である。寧ろ獨逸などよりも支那とか、露西亞とか、英吉利とか、或は地理的には多少遠くても特に經濟的の關係の深い所の亞米利加などと手を握つた方がもつと效果的ではなかつたか？……といふやうな疑問が先づ一應誰れの頭にも浮んで來るだらう。併し乍らそういふ批評的な考を一切振切つて了つて、そうして斷然獨逸といふ特種な國と手を握り、それと協定を結んだといふ外交的態度の中に一つのハツキリした目標が存在するのだ。

御承知の通り日本の過去に於て既に英吉利とも同盟した經驗がある。而もその場合と雖も決して日本が英國と無意義に提携して居たのではない。そこには日英兩國に利害の共通した一個の目標が横はつて居た。言ふ迄もなくそれは兩國がロシヤのツァールのイムペリアリズムを叩き潰すことに在つて存した。その當時の露西亞帝國は先づ大英帝國にとつて非常な脅威であつた筈だ。背面から印度洋に進出せんとするツァールの帝國主義は、印度にその生命線を有する英吉利に取つては堪へ難き恐怖であつたに違ひない。それと共に又その當時の我が日本は露西亞の極東經營の勢力が太平

洋岸から更に延びて朝鮮半島に南下するに及んで、島帝國自身の生存のために默視することが出來なくなつた。

斯くの如くして英吉利と日本とは期せずして奴方から手を握り合つて遂に日英同盟を締結したのである。ところがその同盟の目的とする所は其後に至つて一應達成された。即ちロシヤ帝國は先づ日露戰爭の慘敗に依り、次で歐洲大戰末期のボリシェヴィズムの革命に依り在來の基礎が崩壞したので今迄のやうな意味でのツァーリズムの侵略的脅威が日英兩國共に感ぜられなくなつたのだ。勿論それ以外にも或は加奈陀が邪魔を入れたり、或は北米合衆國が日英同盟の存續を好まなかつたといふやうな特種の原因も存在して居たやうではあるが、大局から判斷すると、要するに防衛の目的物たる露西亞帝國が滅亡してしまつたために日英同盟なるものはその存在の理由がなくなり、從つて自然に解消すべき運命に逢着したのである。ところがその後在來の露西亞帝國の代りに、今度はソヴィエト聯邦といふ今迄よりも遙かに厭な國家が見る〳〵うちに勃興し始めた。それは武力戰と思想戰とを詭辯的に使ひ分けて歷史と傳統ある民族國家の文明を崩壞に導かんと欲する怪からぬ存在であつて、光榮ある民族の精神的文化に生きる我が大日本帝國にとつては前のツァールの帝國以上に到底放置し得ざる脅威の對照物である。然るに一方の英吉利にとつては、この怖るべき蘇聯邦

の存在がそれ程心配の種になる程の敵國といふ譯ではないのである。否寧ろ或る意味に於ては英國は今日の蘇聯邦の味方とさへなつて居る。

我が日本にとりては蘇聯邦がいくら盛んになつても何の役にも立ちはしない。その軍備がいくら充實しても、その主義思想の宣傳がいくら旨く波及されても、それに應じて脅威を感ずるだけで少しも有難いことはない。萬邦協和とか國際間の共存共榮などゝいふ立派な言葉はあるが、尠くとも人類の文化を破壞するのを目的として存在する蘇聯のやうな國家は、我々と共に存し共に榮えて貰つては洵に迷惑千萬である。それでも我慢して平和を保つやうにして居れば尠くとも經濟的にでも何か利益があるかと言ふに、全然それも無い。日本の鼻先に大きな土地を持つて控えてをり乍ら、日本の品物一つ買ふぢやなし、國内の寶庫を日本人のために開かせる譯でもなし、要するに日本の國民經濟にとりては凡そ無意味な國である。換言すれば蘇聯邦といふ存在は、我が日本にとりて政治的にも經濟的にも倫理的にも何一つ役に立たぬ無益有害の國家である。

之に反して今日の英國は必ずしも蘇聯邦を無益有害の國とは見てゐない。元來英吉利人と言ふのは思想的には極めて鈍感な實際的の民族であつて、ボリシェヴィズムの禍がどんなに怖しいものであるか、その世界觀が古い傳統の文明に對していかに有害なものであるか、といふことなどは餘り

考へもしないし、又分りもしない。ボリシェヴィズムとはたゞ野蠻未開の植民地が本國に叛旗を翻へす手段だ位に考へてゐる。だから勿論蘇聯邦が昔のツァール帝國みたいに印度の背面を衝くやうな態度でもとるか、或は英國の植民地に對し特に反英的共產思想でも焚き付けるやうな方策でも執ると言ふなら、英吉利は眞赤になつて腹を立てもしやう。所が今日の蘇聯邦は中々狡猾いのであるから、敢て英吉利を憤慨させやうとはしないのだ。寧ろ獨逸に當るためには成可く英吉利と接近することを、その外交の骨子と考へてゐる。その支那に於ける政策を見ても、自ら外蒙及新疆を併呑するために英佛に雲南、貴州、西康及西藏への進出を許してゐる如きはその邊の消息を如實に語るものである。

更に又經濟的に見ても今日の英國は蘇聯邦をそんなに約らぬ役に立たぬ國とは考へてゐない。矢張り將來は歐露が英國商品の立派な市場であることを非常に期待してゐるものゝ如くである。最近巨額の金を蘇聯に投資した如きは、それに對する立派な證據でなければならぬ。

さう言ふ風に今日の英吉利と蘇聯邦は我々の考へてゐる以上に仲が善いのである。兩國は相互に立派な友邦なのである。だから蘇聯を制肘の目的として日本と英國とが提携握手するなどゝいふことは考へる丈けが既に野暮の骨頂だ。況んや英國と日本とは今日經濟的には激しい競爭戰を展開し

英國は我國の商權を到る所に閉出さうとしてゐるのではないか？　その點では日英は全然敵味方の地位に居るではないか？

だから單に經濟上より見て双方の利益を均整する協議を遂げやうといふ意味でなら、日英と雖も或は接近し又手が握られるかもしれない。併し乍らそれは全然別個の問題であつて蘇聯邦の脅威を如何にするかといふ命題の下に今日日本が英吉利と提携するといふ考へは、私は到底有り得ないと考へるものであります。

次に支那とはどうかといふに、勿論我々は支那に對しては出るだけ親善關係を持續するやうに努力しなければならぬ筈である。然しさう言つて見た所で現在の支那は奈何せん、極端なる歐米依存主義の迷夢より醒める形勢がない。從つて支那との親善問題を解決する一つの前提としては、どうしても歐羅巴諸國の中の支那にも日本にも都合のいゝ一國を選んでそれと共通の目標の定めた提携の態度を執らなければならぬ。

その際英吉利と手を握るといふことは不利であり、困難であり、又實際目的に副はぬといふことが、明瞭となつて來た。日本の政府にもその事情が次第に分つて來たものだからその結果として斷然遠くナチスの獨逸と握手することにしたのである。

御承知の通り獨逸は今日の歐洲大陸に於て國勢上の如何なる點から觀察しても、蘇聯邦に拮抗し得る殆ど唯一の强國である。

强國であるか無いかといふことは各人の認識の相違に基く所であるが、私共尠くとも獨逸戰後の驚くべき恢復力と今日のヒットラァ政權に依りて徹底した協力一致の力を、いろんな方面から研究したり、經驗したり見聞したりした者共が集まつてゐる所の我が日獨同志會の各員は世間の宜い加減の學者やナチス嫌ひの論客がどんなに事實を歪曲して宣傳しやうとしても、根本からそれを覆し得る材料と確信とを持つてゐる。要するに今の獨逸は慥かに强いのである。よく英米流の自由主義に憑かれたり、ソヴィエトの制度が總ての模範であるかの如き飛んでもない考へを持つた人は獨逸の國力を輕信し過ぎてゐる傾があります。その理由とする所は（一）獨逸の外交は徹頭徹尾失敗してゐるとか（二）獨逸が豪らさうに見えるのはヒットラァの專制獨裁に基く形式丈けの强さであつて、人民は怨みを呑んで泣寢入りになつてゐるのだから、本當の事實を洗つて見れば國內は不平と不滿で少しも統一はとれてゐないとか（三）更に或は獨逸の經濟が亂脈を極め國民にはパンが足りない、バタが足りない、海外から品物を輸入しやうにも正貨準備が缺乏してゐる……結局そんな國家が强からう筈はない、といふやうな幼稚な論據に在るやうです。

然しながら私共は先づヒットラァの外交を嗤ふ蘇聯側のリトヴィノフの外交が寧ろ全面的に失敗であつて、それに較べると獨逸側の外交はその包圍陣破壞のためのブロック政策にしろ、ヴェルサイユ條約斷鎖の過程にしろ、全然絕望的な事情から植民地獲得問題に漕ぎ付けてゐる點に至るまで一絲紊れざる外交戰線上の大成功なりと寧ろ驚嘆してゐる位である。

また獨逸の國內に不平不滿が多くつて統一がとれてない……などゝ見るのはそれは寧ろ獨逸と蘇聯とを履き違へた觀方だと思ふ。成程獨逸は左翼全盛時代に作つたマルキシズムの憲法の運用を停めてゐる國であり、從つて多數政黨組織による議會制度は廢止されてゐる國ではある。然し乍らマルキシズムと非愛國的なユダヤ思想とは全然國民精神が破壞されてゐるやうな迷へる民衆の民主的な世界觀は獨逸民族の國威宣揚には何の役にも立たぬことを見て取つたナチスはさう言ふ間違つた民衆の聲に耳を藉すことなく國民的革命に依つて純粹な獨逸の魂を持てる政群に政權の一切を收用して了つた。觀方に依ると、それは亂棒な獨裁であるかも知れない。然しその獨裁は政權獲得者の利己主義に基くものではなくつて、一定の指導精神を持つて國民を始めから啓蒙指導して行く方針を執つた譯だ。從つて始めのうちは何のことだか分らないものだから不平不滿を言ふものがあつたに違ひないが、今日では國民の往くべき道が全體として判然分つて來たのでヒットラァの遺方に向

つて不服を言ふものは殆どなくなつて了つた。今では獨逸の國民は今から十年も前に見てゐた惡夢迷夢より醒め、國民的な改悛悔悟の念に魂を洗つて擧國一致的な前進を續けてゐる。その有樣は隣國のロシアのやうに農民の饑饉などは念頭に置かず、特權階級的政府だけが壓制を事とし、然もその政府部內に於てさへ一部の者の專斷に依つて血腥い疑獄事件を續出してゐるやうな哀むべき國家と雲泥の差があります。

最後に經濟的に見て獨逸にはバタが足りない。爲替基金が尠い……など〻極く第二義的な所へ觀點を置いて無理にその國力の疲弊を歸納しやうと考へる如きは、これは全然マルクシズムに依る批評の根據の弱さを暴露したものであります。私は今短い時間に於て獨逸の統制經濟を全面的に說明する積りはないが、要するに今日の獨逸の國民經濟政策は近世國家の模範とするに足りるやうな立派な方針に向つて邁進してゐる。合理的で一寸の隙もない統制で、經濟を組織化してゐるものだから、足りないものは乏しいものは統計の上にハッキリ現はれて來るのである。簡單な例で說明しても、例へばシャムやペルシヤに失業者がなく、英國に百萬の失業者があつたと言つて、英國の方の經濟政策が滅茶であり、シャムやペルシヤよりも貧困だといふことは出來ない。シャムやペルシヤに失業者があるか無いかは分らないのである。或はその國民の全部が一種の失業者であるかも知れ

ない。さう言ふ工合に獨逸に於て、バタや肉が足りないといふ統制經濟上から絞め出した統計に依つて、獨逸國民が支那やロシヤの百姓よりヨリ多く饑餓の生活をしてゐるなど〻いふ馬鹿な考へはありやしない。足りないからそれを如何にするかと腐心する所に、そこに經濟政策が、即ち一つの政治が存在するのである。獨逸は今迄急激な恢復によつて——大インフレーション時代のゼロの狀態から、戰前以上の繁榮狀態に跳ね上ることによつて——いろんな方面に無理もあれば破綻も見えた。殊にその急激な軍備の擴張に依つて、食糧品の配給狀態にまで種々の影響は受けた。然しその軍備は最早や大體に於て完成したのである。雲霞の如き赤衛の大軍を一手に引受けてビクとも動かぬ用意は大體出來たのである。これからは國民の食糧品を豐富にすること、殊に國內に工業原料を自給確立することに對し四年計畫の實行期に入つてゐる。さう考へて見ると國民の經濟生活に爲政者が一番大きな關心を持つてゐるといふ點で以て、寧ろ今日獨逸の經濟狀態が世界中のどこの國よりも一番希望と光明に充ちてゐると寧ろ私共は反對に考へてゐるものである！

そこで議論を一歩進めて、それではさう言ふ歐洲の一强國たる獨逸と、この際握手提携したのは淘に結構であるが、扨てそれでは一體どう言ふ效果があるか？……といふ提携の效果の問題が起る。

その問題からして、私は茲に本協定には更に第三の意義があることを考へたい。則ち他でもない……本協定の成立は我が日本の全國民に向つて一つの覺悟を要求してゐるといふことである。前にも述べた通り先づ第一に我國が孤立の外交を清算し、第二段に獨逸といふ特別の相手を選んで一定の目標を選んだ外交方針に向ひ、そして第三段として、まさかの場合には國民に一つの退引ならぬ重大な覺悟を要求してゐるといふ所に本協定の言外に含まれた大きな意味が豫想されると思ふのであります。

成程本協定はその條文の文句を讀んでみても、表裏に何等政治的意味を含んでゐない。從つて政治協定の形式を具へてゐない。併し乍ら協定の形式が政治的でないと假定しても協定の齎す所の間接の效果影響は尠くとも政治的であり得ると覺悟しなければならぬ。換言すれば條約それ自身が政治的內容を有せずといふ事と、これが周圍に政治的な效果を齎すといふ事とは全然別問題である。だから本協定が發表されると同時に蘇聯邦は勿論のこと、英國や、米國や、佛國や、果ては支那までが日本に對して極めて不愉快な批評的な、そして狐疑的な態度を見せた事實の如きは、既にこの『非政治的』協定が當面に齎した立派な『政治的』效果であります。

斯かる意味に於ける政治的效果に關して、我々日本國民は今から相當な決心と覺悟とが要求されてゐる。日本の外務省はこの協定を發表した當時には——その他に複雜した外交事情があつた爲めでもあらうが——單に純粹な防共協定に過ぎないものであつて其の他に何等の意義がないと、殆ど腑甲斐ないまでに陳謝辯解、維れ力めてゐたやうであるが、國民はそんな輕い考へで以て、いつまでもウカ〳〵して居たんでは餘程見當が違ふと思ふ。そんな程度でこの協約の效果は何事もなく丸く納まり得るものとは私は信じない。

勿論共產主義を防衛するといふこの條約の內容にも、それ自身の獨立した立派な意義と價値とがある。然し私はこゝで第三インターナシ・ナル（獨逸流に言へばボリシェヴィズム）の本質の如何なるものであつて、又その策動の如何に戰慄すべく如何に憎惡すべきものであるかといふ問題に就いては述べないことにする。それは私の後に杉山教授が詳しく說明されることゝ思ふ。茲に私が特に考へたい事は外でもない。大凡、本協約の立前は蘇聯邦に關係しないで單に第三インターナシ・ナル（コミンテルン）のみを相手にしてゐるし……そして又蘇聯邦自身がソヴィエット・ロシアと第三インターナシ・ナルとは全然違つた別物であると公言して居る。

だからこそ吾々は單に第三インターナシ・ナルなる施設が國際平和に害があるものであり、殊に日本及獨逸の安寧及び福祉を紊すものであつて、兩國は共同して極力その有害なる活動を防衛する

といつてゐる。言換へると兩國は蘇聯邦とコミンテルンとの區別性を認め、それを前提としてこの協定を結んだことになつてゐる。然し乍ら若しも蘇聯邦政府の施政方針にして、將來萬一にも蘇聯國家と第三インターナシ■ナルとが確實に一身同體であることが推定されたとすれば、その時は一體どうなるか？

私の考へではこの防共協定は今迄通りの使命を終つて忽ち重大なる第二段の工作に移らなければならぬ運命を持つてゐるものと思ふ。その第二段の工作がどう言ふ形を採らねばならぬかといふ事は勿論本防共協定の條文中の何處にも載つては居ないが、そんな文句の如何に拘泥せずして、その時の我々の正面の敵は何と言つても『ソヴィエット聯邦社會主義共和國』を措て他にない。

不幸にしてそれは將來の萬一の問題ではなくつて、現在既に一歩々々さう言ふ傾向に向ひつゝある。元來今日の蘇聯邦の採つてゐる帝國主義的侵略は必ずしも正規武力の進出計りではなく、武力戰と思想戰とをグロテスクに混ぜ合せた一種の極めて不愉快な卑怯千萬な侵略の形式を採つてゐるのである。而てその思想戰方面を第三インターナシ■ナルなる名目に依つて今の所では、狐や狸が下手に化けたやうなカモフラージして居るのであるが、若しもそのこんがらがつた一つの有機的二元組織が蘇聯邦そのもの〻一元的意思に歸納されるやうに、はつきり尻尾が捕まつた場合、その時

こそは日本も獨逸も默つて指を銜えてゐらるべきでない。敢然起つて膺懲の征師を起し、東西より之れを叩き潰ぶすべきである！

勿論さう言ふ表現は穏かでないかも知れない。然しこの協定が出來た以上は或は事柄がそこまで進展するかも知れぬ事を慮つて、今のうちからその心構へをしてゐることが肝腎である。私がこの協定はその奥にまさかの時に慌てない丈けの國民の一大覺悟が要求されてゐると言つたのはその意味であります。勿論今の所は蘇聯側の論理をそのまゝ前提に受け容れてこの協定を作つてあるのだから、蘇聯側は何も苦情の言へる筋のものぢやない……然し向ふが勝手にその論理を破る樣な行動の見える場合、日獨防共協定は今一歩進んだ本統の戰爭過程に這込り得るといふことは、觀方を換へると、その責任が總て今後の蘇聯政府の態度如何に存するとの謂になるのだ。我々はこの際蘇聯政府の態度がコミンテルンと蘇聯邦の武力とを混同せざるものであることを希望して歇まない。その意味に於て本協定は明かに世界平和への偉大なる貢献であると考へることも出來る。そう考へても決して詭辯でもなければ逆説でもない。何んとなればこの協定は蘇聯に於ける世界の平和を棄すが如き亂棒な軍備の擴張に對し一種の辛辣なる束縛の力を與ふるものである。換言すれば世界の不釣合な脅威に對し、勢力のバランスを與へ、從つて人類の平和に寄與貢献をする事が極めて大きい。

扨て最後則ち第四に於て、この協定は（前にも獨逸新聞の觀方を引照する時に申し上げて置いたが）鳥渡普通の條約などでは考へられない一種の文化的な意味を持つて居るのであります。則ち未だ曾て類例のない奇妙不可思議な國際條約なのである。一ト口に文化的と言つても別にお芝居とか音樂といふやうな藝術的意味を持つたものではない。又哲學的若くは宗教的な申合せでもない。それは國際間の特種國家がその世界觀的相似共通點を發見したために起つた洵に面白い提携なのであります。

と言ふと茲に一つの大きな難題が起る。由來日本と獨逸とは國體も民情も歴史も總てが違つてゐる。而も現在の日本の中には獨逸流のナシ・ナルソシャリズムの遣り口に對して寧ろ快からず思つてゐる國民も事實非常に多い。さう言ふ連中は協定それ自身の意義に就て熟考するよりも、先づ日本がこれを契機にナチスみたいな國になりはしないかと怖しく心配するのである。併しながら私共はこの協定に依て日本がナチス化するとか、しないとかいふことを同時に問題にするのは全然當らないと斷言するものである。

何故ならば假令この協定が文化的の意義を持つて居ると言ふものゝ、所詮は二國間の外交問題なのである。二つの國が文化といふ一つの前提を以て手を握つたにしろ、その內容がボリシェヴィズ

ムの排擊といふ共同の利害に關する範圍に於て具體的な外交上の協同動作をしやうといふ約束をしたゞけの話であるから、そこからその儘日本のナチス化といふ所へ考へを飛躍せしむることは餘りにも見當違ひだと言はなければならぬ。

例へば日本が英國と特種の親善條約を結んだとしても別に日本が英國のやうなあんな變な王室を持つた國になれる譯ぢやあるまいし、又假りに米國を特定の誼みに基く締盟關係に立つたとしても日本は敢て米國の共和制度を採用して星條旗をなびかせる事も考へられない。そこまで神經質に心配しなくちやならぬやうなら、敢て獨逸と計りでなく、一體どこの外國とも同盟とか提携とか握手とかは出來ないといふことになる。若しも國民が今、獨逸と提携するといふ聲を聞いて、すぐナチス化を怖わがらなければならぬ狀態に在りとするならば、日本といふ國も實は洵に情けない國だ。それは日本國民の中にハツキリした國家觀が確立してゐない證據である。

換言すれば日本國民が豪らさうなことを言つた所で、何等の確かりした魂をさへ持つてゐないといふことを中外に表明するやうなもので、實はそれ位、耻かしい事はない。所詮は國民精神それ自身の問題だ。今日獨逸が態々我が日本へ親善の手を差し延べて來たといふのも畢竟は我が日本の國民精神が世界に比疇し得ざる程高遠にして偉大なることを知つてゐるからに他ならぬ。

その點に於ける日本は寧ろ獨逸から羨まれる國であり、師表と仰がれる先輩の國である。その證據には私は現に獨逸に於てナチスの有力な幹部の人々の口から『日本は或意味に於て獨逸の先生だ』といふことを時々聞かされた。獨逸人は鼻つ柱が強いから中々外の民族を褒めるなどゝいふことは仕ない。彼等は自分の民族がイギリス人やフランス人やアメリカ人などよりも遙かに優秀だと考へてゐる。ロシア人なんかは先天的な野蠻人と極めてかゝつて殆ど問題にも何にもしてやしない。

それが日本を褒めるのである。『我々獨逸人は近代文明を創り出す技術に於ても學問に於てもどこの誰れにも負けない自信がある……近頃はその上に國家の秩序に於ても統一に於ても又民族精神自覺の點に於ても斷然として頭角を拔いてゐる積りでゐる……だから我々は日本に對しても決して獨逸が劣つてゐるとは思はぬ……我々の方が寧ろ先生の積りでゐる……然し今日の世界に誇り得る第三國のナチス獨逸がたゞ一つだけ日本に叶はぬものがあるとするなら、それは日本の國體だ…三千年に近く上に萬世一系の連綿たる皇統を有し、國民がそれを基礎として君民一體の國威を中外に宣揚せんとする共の驚くべき傳統と歴史に到つては、獨逸がどんなに自慢してもこれ丈けは作ることが出來ない…恐らくは今後三千年かゝつてもこれ丈けは作り出し得ないだらう』…といふ感慨を私は嘗て獨逸人中の最も信用の出來る學者の一人たるハウスホーファ博士から聞いたことがある。

蓋しそれは今日の國民精神文明に覺醒した獨逸人の等しく痛感する所であらうと思ふ。

然し乍ら若しもその際日本人の腹の中に、實は日本精神を基調とする確かりした世界觀が一つも這入つて居ないと假定するならば、別に日獨防共協定など結ばなくつても、ナチス化するものならナチス化するだろう。その心配は別にナチス化の問題計りぢやない。ボリシェヴィズムだつてさうである。現に日本と露西亞とは提携も何もしてや仕ないに拘らず、ソヴィエトの制度を天啓の如く救世主の如く喝仰し憧憬する者が依然として存在するではないか？　假令それ程までゞないとしても『フラシヨ排擊』とか『人民戰線』などゝいふ赤禍宣傳の口車に乘せられて、モスコウの彼方ではクレムリンの中でスターリンが舌を出して笑つてゐるのを氣の着かない連中が可成り澤山居るではないか？　情けない次第である。然し情けないからと言つて敢て相手を恨む譯には往かぬ。責務は總て國民自身の態度の中にある。決して協定したから又仕ないからといふ協定そのものゝ罪ぢやない。

又今一つ別の方面から觀點を變へて考へて見た所で、日本はナチスに成らうつたつて成れない事情がある。由來ナチスは獨逸獨特の國民精神を現はしたものであつて獨逸の歴史民情傳統を履んで來た民族のみに體得し得らるべきものである。從つて獨逸人がいくら力んでみても——前に述べた

通り――一天萬乘の皇統を誇る我が日本の國體をそのまゝに實現することは不可能であり、又獨逸人が古の光榮ある羅馬帝國の再建を理想とするファッシズムの伊太利と同樣にならうとしても決して成れないと同じ程度に於て、逆に伊太利も亦我が日本もナチスの獨逸に成ることは出來やしないそれ程ナチスといふものは一種獨特のものである。

さう誰れでもかれでも安つぽく模倣の出來るやうな體制ではない。一二の例をとつて考へて見てもさうだ。ナチスの根本精神はアンチセミチズム――即ち猶太人排斥――の中に現はれ、從つてアンチセミチズとナチスの思想とは一身同體であるとさへ考へられるが、それは現代の獨逸ならばこそ納得の出來る現象であつて、セミチズムとの相競をその歷史と傳統とに持つてゐない所の支那や日本の國民精神の勃興は必ずしもそんな所から出發してゐる譯ぢやない。從つてセミチズムの何たるかゞ分らぬやうな（又分る必要が少いと考へてゐるやうな）民族がナチスになるなんてことは有り得ないのである。

又ナチスはそのまゝヒットレリズムである。ヒットラァといふ一人の英雄の中にその一切が晶化されてゐる。ヒットラァの睨んで指示する目標を指導原理とし、國民が一絲紊れず追隨して行くのがナチスである。さう言ふやうな英雄はそんじよそこらに幾らでもあるものぢやないし、又獨逸に

だつて百年に一人生れるか千年に一人生れるか分りやしない。だからヒットラァ見たいな英雄も居ないのに、日本が一片の協定の成立でナチスになるなどゝ飛んでもないことを考へる人間はナチスの本質がよく分つてない證據である。それはナチスといふ言葉を單に英米に於けるデモクラシイの安雜誌で理解したか、或は共產主義のABCで手ほどきして貰つた程度の人間の囈言に過ぎない。

然し乍らさう言ふ嚴格なる意味に非ずして、日本も獨逸も共に民族の特長に根ざしつゝ國民の使命を自覺し、大分と正義とを好愛する『ナシ・ナリズム』に於て双方何等かの共通點があり、從つてこの日獨防共協定により、この共通點が益々切瑳琢磨されるといふ意味に於て獨逸が日本の長所を採り、日本が獨逸の勝れるを學ぶといふことは大に考へられるし、又大に有つていゝことである。だから假りに固有の民族傳統的な『ナシ・ナリズム』を深め且つ高むることを『ナチス』化と呼ぶといふならさう言ふ『ナチス化』は寔に結構ではないか？　私は寧ろ日本民族が非常に目覺めなければならぬ秋に當つて、戰敗的平和主義や猶太人流の國際人道主義や十八世紀式權利義務を基調とする個人主義的リベラリズムを歪みなりにも維持したいために、さう言ふ意味の『ナチス化』を毛嫌ひする人々の氣が知れないと考へるものである。

然り、私は斯かる意味に於て――則ち日獨双方が各自の民族的特長に根ざしつゝ各自のナシ・ナ

リズムを他山の石として學び合ふ意味に於て――日獨協定はその立派な契機となり得るものなることを固く信ずる。だが契機になつたからと言つてそれ以上の積極的な歩み寄りを自然に放任しておくべきではない。

この場合に日本獨特の文化的內容をも此方から進んで獨逸國民に知らせて、これを啓蒙してやる必要もある。今日まゝで放つて置く限り、例へば日本に非常に同情のあるファンク博士のやうな人が來ても、日本が民族的使命といふ立場からでなく、單に土地狹隘のため他國の國土を奪ふといふやうな西洋流の唯物的な見方からしてあの『新しき土』みたいな國辱的フィルムを作らせて歸へすといふ如き不始末が起る。それは獨逸人の罪ぢやない。これを導いてやる者のない日本自身の罪だ今日の獨逸人は友邦日本の文化の眞髓を誰れしも心から知りたがつてゐる。我々は力めてその內容を獨逸人に理解させなければならぬと思ふ。

又反對に我々の方も相手の獨逸の本質をもつとハツキリつき詰めて研究する必要がある。今日の日本國民は餘りにも新しい獨逸を知らなさ過ぎるか、それとも餘りにも誤解しすぎてゐる。その證據には今日一般普通のインテレクチュアルな人々は（特に所謂ナチス嫌ひと呼ばるゝ人々）の通念に依る獨逸なるものは、まるでソヴィエット露西亞の出來損ひみたいな暴虐壓制の獨裁國であり、

然もまだソヴィエット露西亞程度まで徹底して居ないで、やつと一定の過程に足踏みして、そこで舊式の國家主義を行つて居る位に映つてゐる、やうである。

中には共產主義の詭辯學者たるユダヤ人ヴァルガあたりに教へて貰つた表現をそのまゝに『第三期資本主義の斷末魔を切り拔け得ないで氣の狂つた反動國家』であるから、蘇聯のやうに堂々と五年計畫的な產業統制も出來ないで、書物を焚いたり學者を放逐したり見當違ひな狂暴なことをやつて統制の觀念を穿き違えてゐるなどゝ眞面目に信じてゐる學者さへ多い。

從つて例へば統制問題に關する色々な新聞社の論調であるとか、何々年鑑といふやうなものを讀んで見ても先づ蘇聯を代表的なものとして堂々と一番初めに出す……さうして『コルホーズ』がどうだの『スタハーノフ式』がどうしたの、最高經濟委員會の統計は斯うなつてるのなどゝいふ風なことをさも勿體振つて一番詳しく書き立て、寧ろ日本にはずつと實際的に參考になる所の獨逸のことは餘り澤山書いてない……といふのはそういふ方面に關してはソヴィエット聯邦が一番模範的徹底的であり、獨逸の方は寧ろあとから始めた模倣の出來損ひであるかの如くに取扱つてゐるものが甚だ多い。然し蘇聯邦と獨逸とはそんな並列的比較的な取扱が出來ない程國家としての本質的な態樣が異ふ。一は猶太式共產主義に基き他はゲルマン式國民主義に基くと言ふ主義そのものの背反は

勿論であるが、そのことに考へないはしても、なほ兩國に共通した如く見える所の、强力內閣集中の傾向に於て兩國の間には融合の出來ない溝がある。

從つて兩者の程度の問題に非ずして、全然質の相違から來てゐるのである。即ち獨逸の『國民社會主義』の國家はマルキシズムを世界觀とする蘇聯邦と支配統治の性質が逆になつてゐる。何故ならば『國民社會主義』の國家が樹立せられた時の當時の所謂革命は純然たる精神革命であつた。物質を目標とせざる革命であつた。と言へば言葉の表現が極めて平凡に響くが、實はその中には非常に大きな意義が含まれて居るのである。

例へばヒットラァの政府が樹立して先づ第一番に着手したことは何かと言へば『文化の問題』であつた。吾々が普通の頭で考えると文化の問題なんて——勿論重大な問題であるが——然し一刻を爭ふ國家危急の非常時に際會して先づ一寸迂遠な、そして餘計な問題であるかのやうに見える。從つて獨逸の行き方はレーニン一派の共產主義者が『我にパンを與へよ』とか『働かざる者は喰ふべからず』などの標語に依つてソヴィエト革命を起したのとは雲泥の差がある。序でながらレーニン式な行き方は敢て蘇聯計りの現象ぢやない。世界中の普通の國家に於て一つの舊政權が行詰つて顚覆し、そして次の政府なり內閣なりが立つて時局を收拾する場合、その態樣は大體蘇聯のと同じこ

とだ。一般に內閣が國民の信用を失つて顚覆する原因は大抵何等かの物質的な問題——例へば豫算の問題とか、失業者救濟の問題とか乃至は租稅の問題——などに動きがとれなくなつて打開の方法がないからである。從つてそれに代つて時局を收拾する次の內閣も亦その行き詰りを打開するに足るやうな租稅とか豫算とかの、大體前と種類を同じくする物質的な新政綱で國民を納得させることが近代國家の何所に於ても見受けらるゝ普通の定石である。だからヒットラァ政權の現はれない以前の獨逸共和國に於てもこの定石は實際幾回となく繰返された。例へばウィルト內閣……クノー內閣……ストレーゼマン內閣……又はマルクス、ヘルマンミュッラァ、ブリュンニング等の諸內閣に到る迄、皆な申し合せにやうに或は豫算、或は租稅、或はインフレーションといふ風な問題で躓き倒れ、又それを救濟する爲に組閣されたものであつた。

その點に於ては遺憾ながら我が日本の歷代內閣と雖も大體同じ形式を辿つてゐる。換言すればソヴィエトロシア式だ。要するに『働かざれば喰ふべからす』といふ物質上の爭鬪が政權を繞る一番重要な事項になつてゐる。勿論最近は內閣を組織する者は『八紘一宇の皇國は…』とか『國體を明徵し…』云々などゝいふ美しい言葉を使つた所謂『政綱』なるものを發表する。さう言ふ言葉を使はなければ政綱にならぬと考へて居るらしい。が然しそれは單に言葉に過ぎない。床の間のお飾り

に過ぎないもので、別に行動政綱には關係したものでない。行動政綱としては依然として物價が上るとか、不るとか、株屋が喜ぶとか腹を立てるとか言ふ形而下的物質的な懸案を生命の問題となし第一義の問題としてゐる。然も長い習慣の結果國民の方だつてそれを當然と見る。國民はたゞどうすれば租税を安くする爲政者が立つか、二杯の飯を三杯喰はしてくれる政府はないかと計り考へ、物質生活の安定を計ることが政治の一切と心得るやうになつた。だから『暮らしを樂にさせてやる』といふ行動政綱の標語を掲げる限り、どんな無意義な既成政黨でも民衆の心を引つけ得るために立派に存在の意義があるのだ。庶政一新といふ考へでもその庶政の政の字は大體物質的事情であつて經濟的組織の方法に束縛を加へることが主になつてゐる。國民の魂に變革を加ふる如きは單に個人の自由な覺醒を待つ方針をとり、これに擧國的な實際施設を行ふといふやうな方法は採らないのだから在來の考へで庶政一新を極端に押し進めて行つても日本は到底獨逸みたいな國になる心配はない。寧ろ一歩々々ソヴィエトロシアの如き壓制國に進み得るのみであらう。

さて獨逸に於ても在來の政府は依然として國民の物質生活を基調とする政綱に據つて起つたり滅びたりのシーソー・ゲームを反覆してゐた。そして最後にヒットラァの國民的革命政府が樹立されたのである。そして又實際ヒットラァ政府が天下を取つた時も獨逸の經濟狀態は非常に亂れて居つ

たので、一般世人はヒットラァ政府が如何なる財政々策、如何なる租税政策を執るか、又現在の資本主義に對して如何なる見方をするかといふやうな實際政策に對し非常な興味を持つて眺めて居た所がヒットラァ政府の最初にやつたことはそんなことには全然關係のない所の『精神文化の復興』といふ點にあつたので、これは實に迂遠極まる話だ……ヒットラァと言ふ人間は理論も何もない洵に幼稚極まるものだ……と露西亞側などでは口を極めて嘲り嗤ひ、現に唯物的科學方法などゝいふ露西亞的洗禮を受けて得々たる日本の批評家などは可笑味の失せて間の抜けた今頃、それに合槌を打つて笑つてゐるのである。

然るにヒットラァは外部の見當違ひな冷笑などには頓着せず、斷然『文化革命』を最初の實際政策として發表し、然もこれを行動の上に具體化したのである。從つて今日のナチス獨逸が國家的に統制されて居る姿を見渡すと、日本の或種のインテリが國家資本主義の蘇聯邦から敎はつたやうな意味での『統制』といふ狀態とは全然毛色の違つたことをやつて居る。即ち文化の世界が政府の直營若くは國營、になつて居り、物質的の方面は寧ろ第二義的、第三義的に取扱はれ、その或る範圍の如きに於ては自由に放任してあるといふ有樣だ。何よりも先づ宣傳の方法に依て國民の輿論に一定の指針を與へ、若しこれに反するものは用捨なく制限するといふ所謂積極的及消極的宣傳方法を

第一義にして――即ち國民文化の問題を第一義にして――敢然邁進したところに、如何なる他の外國の追隨をも許さぬ新獨逸の非常な特色が存するのである。

然し私はこの講演に於て獨逸の新しい施設を細かに說明する時間を持たないので、それ以上に立入るのは見合せるが、要するに右の場合、獨逸が特に『國民文化』と呼んだものは獨逸古來の歷史的傳統精神たるゲルマニズムである。所がそれと同樣なものは勿論我が日本の中にも存在してゐる否我々日本人はそれ以上にもつと偉大なる精神を持つてゐる筈である。

それに拘らず情ないかな、現在の日本の政治社會的な國情は在來の日本精神に戻る所き極めて多い。我々の持つてゐる傳統の精神は世界に比類なく崇高偉大なものであるにしても、それはまるで祕密の寶玉の如く全然國民個人の內ポケットに藏ひ込まれてあるのであつて、他の別のポケットには西洋の文化の糟粕が收められて居るかの觀を呈して居る。而もその別のポケットに這入つてゐる西洋文勿の糟粕、換言すれば十八世紀的な自由主義的な文物制度の力のみに依つて現在日本の國家は運轉されて居る有樣である。從つて左のポケットに這入つて居る內容とは全然有機的に結びついて居ないのだ。所が獨逸人には日本のそのカラクリがよく分らないものだから、日本人は昔から日本の精神を持つて居るので豪い……俺達も亦最近になつて眞のゲルマン人に還つた以上、これから

はこの偉大なる日本と立派に手が握られると早合點をしてゐるやうである。それは間違つちや居ない……慥かに日本の方はさう言ふ偉大な精神を持つて居る。但し日本人は前にも言つたやうにまるで貴い寶玉として――現代の生活には全然關係のない寶として――胸の奧底深く秘めて持つて居るだけであつて、それを立法乃至行政的、社會機構的、近代文化施設的又は經濟制度的な現象に實現する意思もなければ能力もない。そこに我々日本人の大きな悲劇があり、口に言ひ現はせない惱みが存在して居る。それだからこそ日獨防共協定が發表された時だつて、その缺陷が醜くも表面に曝露して、日本側のいやな態度がお互の眼の前にチラついたではなかつたか？　勿論日本のインテレクチュアルな人々の中にも、この防共協定そのものに眞向ふから反對する者は非常に尠なかつたかも知れぬ。ソヴィエトロシアから毒素の如く浸潤し來る第三インターナショナリズムを防衛しなければならぬといふことは、未轉向の非國民でない限り誰でもが贊成する所であらう。

然るに彼等が愈々日獨防共協定といふ問題を取り上げ、それを政治上の篩にかけて考へて見る場合に、彼等の政治上の篩に奈何せん、その性質が新興獨逸の精神主義に全然反對である所の十八世紀式な西歐雜巴流の設備機構の模倣なのである。即ち彼等は第一のポケットには觸れないで、第二のポケットに收つてある手段のみに依りて物事を批判するのであるから、當然大和魂を持つてゐる筈

の日本人でありながら、我等が祖國を崩壞に導かんとするボリシェヴィズムの防衛手段に對してツベコベ理屈を並べたり、不徹底な皮肉でこれに反對をしなくちやならぬ……といふ狀態が今日の新聞雜誌にその論調として醜く現はれて居る譯なのである。

私はこれ以上もう申上げぬ。一方の右のポケットに這入つてゐる尊いものは如何なる性質のものであるかといふことは更に松本德明君が說明になることゝ思ふ。又それに對して脅威を與ふるもの——即ち獨逸流に言ふボルシェヴィズム——の如何に怖るべく、憎むべく唾棄すべきものであるかに就てはすぐ後に杉山謙治君が述べられる筈である。

そこで私は以上、私の演題たる『日獨防共協定の意義』に就て（一）日本が孤立の狀態より離れたといふ狀態と（二）日本の外交が一つの目標を瞠める態度を執つたといふことと（三）從つて國民に特種の覺悟を要求してゐることと（四）最後にはこの協定には不思議な文化的意義を持つたものであるといふ四點を强調し得たと信じ、長々の御淸聽を謝してこの演壇を降る者であります。

一月十四日　於軍人會館

日獨同志會設立趣意書

憶ふに今回成立した日獨防共協定は世界大戰以來國際の外交界に新たなる希望と曙光とを投じたる劃期的なる大事業であつて、我等國際正義に基く平和に特別の關心を持つ者の等しく欣快とする所である。然しながらそれと共に將來この協定を强化擴充して有終の美あらしめんが爲めには尙ほ前途に一方ならぬ困難と障害との橫たはれることを想はざるを得ない。

蓋し我等の憂慮に堪へざるは、この防共協定に對し國民大衆がその眞諦の那邊に在るかを識らざる結果、一般に甚しく冷淡であり、更に又智識階級を代表すべき日本の言論界が誤れる認識よりして稍もすればこれに好意を示さない傾向の見えることである。

この際我等民間に志有るの士は倩々邦家國策の大計を憶うて、事情をその儘に放置することが出來ない。然も政府に於ても亦國民に於てもこの協定の意義闡明に就て遺憾乍ら積極的な努力の支拂はれてゐない事を痛感する。玆に於てか我等は今日獨同志會なる一團體を結成し、一方日獨間の文化交換及親善關係の促進を目的とせるの諸團體等とも提携して相互に鞭撻し合ひ乍ら、爲政當局に

對する出來る丈けの示唆を寄與すると共に、誤れる智識階級、並に事の眞相に徹せざる國民大衆に向つて一大啓蒙を遂行したいと思ふ。

顧みて我が外交政策に關する國内の輿論を檢討するとき我等はナチス獨逸の本質と國是とを廣く國民大衆に識らしむるの要を痛感する。例へば獨逸の指導者主義と所謂「ファッショ」乃至獨裁專制主義とを同一視するが如き重大なる誤謬を是正一掃するは啻に獨逸第三國家の本體を闡明する所以なるのみならず惹いてはナチス獨逸と皇國日本との世界文化史上に有する使命の共通點を發見することゝもなるのである。勿論我等は日獨兩民族に固有なる歴史傳統の相違點を飽く迄も判然と認識する。否、寧ろその特異性を確認しつゝ更に現下の紛糾錯綜せる國際情勢に鑑み、日獨兩國の緊密なる提携を必然且重要なりと思惟するものである。

要するに人類文化當面の敵たる「コミンテルン」の破壞工作を徹底的に防衛するは常に人類の福祉と平和とを希念する我等日本國民當然の責務なることを痛感し、特に今や獨逸を中心として我が日本精神を廣く世界に弘布理解せしむる好機たることに鑑み、飽迄も日本國民として純正眞摯の立場に於て、凡ゆる合法手段に依り一大國民啓蒙運動に從事せんとするものである。

それが我等の日獨同志會設立の基本的な趣旨に他ならぬ。

昭和十二年四月

日獨同志會

世話人（順不同）

松本德明
藤澤親雄
黑田禮二
五十嵐治孝
大橋薫
杉山謙治
井村平次郎
宮崎龍介
中山優
矢荻富橘
野津謙

東京市京橋區銀座西五丁目四ノ四（德田ビル内）
日獨同志會本部
電話（銀座）三八六八
振替東京 一三六九一六

日獨同志會々則

第一條　本會ハ日獨同志會ト稱ス

第二條　本會ハ本部ヲ東京市京橋區銀座西五丁目四(德田ビル內)ニ置キ內外主要ノ地ニ支部ヲ設ク

第三條　本會ハ日獨防共協定ノ意義ヲ闡明シ共ノ重要性ヲ廣ク國民ニ徹底セシムルト共ニコレニ對應スベキ內外國策ノ研究調査ヲ爲スコトヲ以テ目的トス

第四條　本會ハ前條ノ目的ヲ達成スル爲メ講演出版其他必要ナル事業ヲ行フ

第五條　本會々員ヲ分チテ正會員及贊助會員トス

第六條　本會ノ趣旨ニ贊同シ會員二名以上ノ推薦ニ基キ常任理事ノ承認ヲ經ルモノヲ以テ正會員トス　(正會員ハ會費年額壹圓ヲ醵出ス)

第七條　本會ノ趣旨ニ贊同シ目的達成ニ協力援助スル者ヲ以テ贊助會員トス

第八條　正會員並ニ贊助會員中ヨリ理事若干名ヲ推擧シ理事會ヲ構成ス

第九條　理事會ハ本會ノ目的達成ニ必要ナル研究調査ニ任ス

第十條　本會々務執行ノ爲八名以內ノ常任理事ヲ置キ　常任理事中ノ一名ヲ以テ本會ヲ代表セシム

以上

切……線……取

入會申込證

貴會ノ趣旨ニ贊同シ正會員トシテ入會申込候間御承知相成度候

昭和　年　月　日

住所

職業

氏名　　年　月　日生

日獨同志會御中

369
698

昭和十二年四月廿日　印刷
昭和十二年四月廿五日　發行

東京市京橋區銀座西五ノ四（德田ビル內）
編輯兼發行者　五十嵐治孝

東京市京橋區築地二ノ四
印刷者　岩崎勝一

東京市京橋區築地二ノ四
印刷所　富士精版印刷社

東京市京橋區銀座四五ノ四（德田ビル內）
發行所　日獨同志會

日獨同志會幹事

印度洋及地中海

貴會ノ趣旨ニ賛同シ五會員トシテ入會申込ス

入會申込書